

## パプリカの育苗期摘芯2本仕立て栽培

農業・園芸総合研究所

### 1 取り上げた理由

パプリカの栽培では、株の着果負担が大きいため、それを軽減するための仕立て方法等の検討がなされている。主枝2～3本仕立てが主流であり、管理のしやすさから2本仕立てが多く行われている中、高知県では、育苗中に生長点を子葉直上（または、第2葉直上）で摘芯する2本仕立てが試みられ、つる下げ作業の軽減や増収となる結果が得られている（2010年）。本県においても、育苗期摘芯2本仕立てとし、草勢維持、増収効果について検討したところ、効果がみられたので参考資料とする。

### 2 参考資料

- 1) 収穫開始時期の草丈は、主枝分岐点の高さの違いから、慣行2本仕立てよりも育苗期摘芯2本仕立てで10 cm以上低くなる(図1)。
- 2) 育苗期間中の培養液濃度を EC2.4 dS/m 程度の高めに管理すると、茎径が太く推移する(図2)。
- 3) 慣行2本仕立て及び育苗期摘芯2本仕立て共に、7月と11月に収穫のピークがみられ、育苗期摘芯2本仕立てでは11月のピークが高くなり、後半の収量が多くなる(図3)
- 4) 摘芯2本仕立てで、育苗期間中の培養液濃度を EC2.4 dS/m 程度の高めに管理すると、強い栽培枝を伸ばすことができ、増収につながる(表1)。

### 3 利活用の留意点

- 1) 慣行2本仕立てでは、最下着果節から2節までの果実を摘果するが、育苗期摘芯2本仕立てでは最下着果節から着果させる。
- 2) 摘芯2本仕立ての収穫開始は慣行2本仕立てよりも1～2週間遅延する。
- 3) 試験の耕種概要は下記のとおり。

#### 【耕種概要】

供試品種 パプリカ品種「スペシャル」

育苗期摘芯2本仕立て：子葉からわき芽が確認できた時点（本葉6枚程度）に、生長点を子葉直上（子葉と本葉の間）で摘芯し2本仕立てとした。

慣行2本仕立て：定植後、草勢の強い分枝を選び2本仕立てとした。

育苗中の培養液濃度：大塚A処方（EC1.2または2.4 dS/m）

播種： 2010年1月20日

定植： 2010年3月31日

栽植条件： 畝間180 cm 株間20 cm 2本仕立て

栽培様式： 固形培地（ヤシ殻繊維）を使用した養液栽培システム

給液方法： 大塚A処方（EC1.2～2.4 dS/m）で一律管理



子葉直上摘芯



育苗期摘芯2本仕立て



慣行苗（2本仕立て前）

（問い合わせ先：農業・園芸総合研究所園芸栽培部 電話 022-383-8132）

#### 4 背景となった主要な試験研究

##### 1) 研究課題名

寒冷地の気象を生かしたパプリカの長期どり栽培技術の確立 (2008-2010 年度)

##### 2) 参考データ

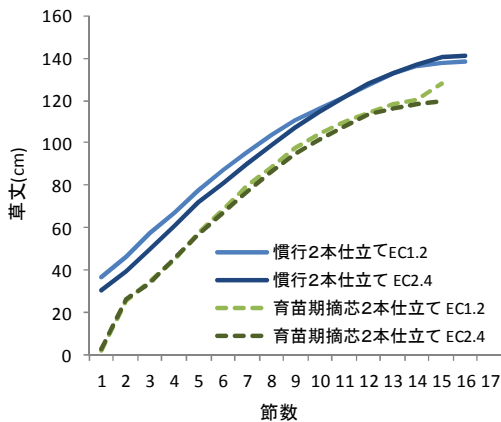


図1 収穫開始時期の草丈 (2010年7月1日調査)

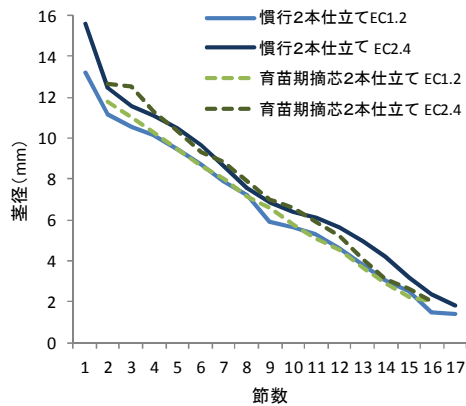


図2 茎径の推移 (2010年7月1日調査)

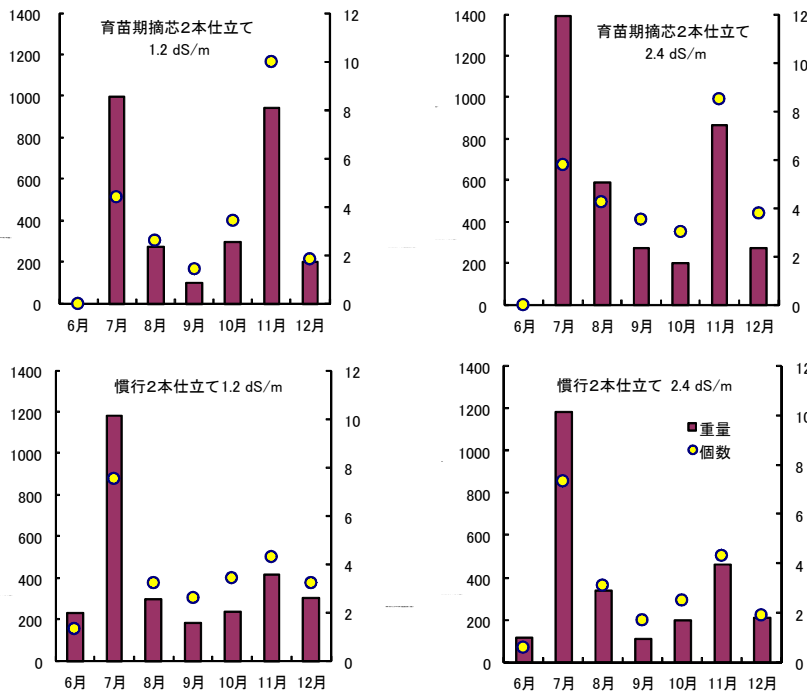


図3 株当たりの月別総収量と収穫個数の推移

表1 摘芯2本仕立てが総収量に及ぼす影響

	育苗中の 培養液濃度	総収量		平均1果重 (g)
		個数	重量(g)	
育苗期摘芯2本仕立て	1.2 dS/m	24	2816	117
	2.4 dS/m	29	3585	124
慣行2本仕立て	1.2 dS/m	26	2837	109
	2.4 dS/m	25	2805	112

(収穫期間は2010年6月～12月)

##### 3) 発表論文等

なし

##### 4) 共同研究機関

高知県農業技術センター, 野菜茶業研究所